

下大利の御大師様 ～御笠郡の数珠繰り行事について～

山村 智子

1. 御大師様

御大師様は真言宗の開祖・空海を「オダイシサマ」、「オタイシサマ」と尊称し、信仰する信者で行う宗教行事のことである（以後、行事のことを御大師様と記す）。この行事は、空海が入定したとされる3月21日の前日の20日を御通夜（オツーヤ）、あるいは恩日（オンピ）、遠忌（オンキ）として、毎月20日の夜に行われる。宿（ヤド）と呼ばれる当番の家に集まり、真言や経を唱えながら大数珠を繰り回す数珠繰りを行う。数珠繰りの後、宿が準備する茶や菓子で歓談するまでが行事の流れである。

また毎月20日の行事ごとに一定金額を積み立て、運営や懇親、時には相互互助として使用されることもあった。

このように特定の信者だけで共同利益（家内安全、健康長寿など）を祈願する集まりのことを講といい、対象とする信仰により男女に分かれて講を持つことがある。戸主（主に男性）だけで行う庚申講があり、本稿で紹介する御大師様は主に女性だけで行われたいわゆる大師講のことである。

御大師様は明治期以降、大野村を含む御笠郡内の農村地域に広がり、多くの集落で毎月20日夜8時に女性たちが宿に参集し、数珠繰りを行っていた（表1）。しかし、昭和40（1965）年代以降、農村部は急激な都市化、あるいは過疎化が進み、職業の多様化や住宅環境の変化、同居世帯の減少等から御大師様を取りやめるところが増えていっ

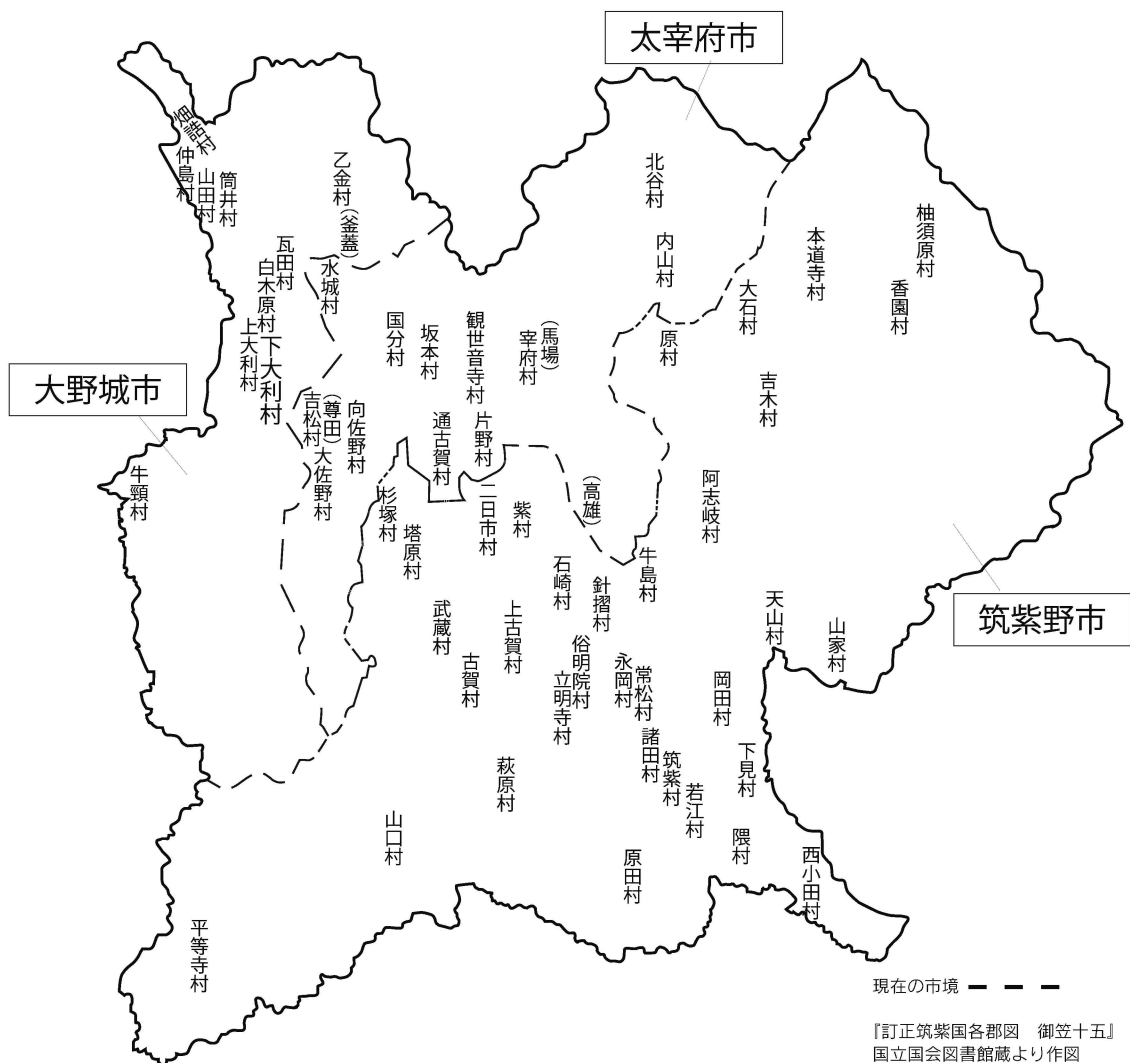


図1 御笠郡の村配置図

『訂正筑紫国各郡図 御笠十五』
国立国会図書館蔵より作図

() は表1にある地名

下大利の御大師様～御笠郡の数珠繰り行事について～

大野 城市	地区	下大利	呼称	オタイシサマ	祭日	毎月20日午後8時	神仏 ほか	十三佛（掛軸）、弘法大師像（掛軸）ほか	供物	豆ご飯（夏はビース豆御飯）、菓子、果物など	準備する食事など	お茶、茶菓子	十三佛真言 光明真言 「南無大師遍照金剛」 「南無阿弥陀仏」 十句観音経	7回 21回 7回 2回
	内容	毎月20日午後8時に宿（当番の家）に集まり、座敷に掛けられた弘法大師像と十三佛の掛け軸に線香を上げて、手を合わせる。箱から数珠を取り出し、真ん中の机に真言の紙を置き、鉦を叩きながら、十三佛真言7回と光明真言21回、「南無大師遍照金剛」7回、「南無阿弥陀仏」7回、十句観音経2回を唱え、数珠を繰る。鉦を叩く人が唱える回数を数え、1度唱えるごとに1回鳴らし、決められた回数を唱え終わると2回叩く。大珠と中珠が回ってきたら、その都度、礼拝する。数珠繰りが終わると、お茶と菓子で款談する。宿は祭壇を整え、豆ご飯（夏はビース豆御飯）や果物、菓子などを供えし、茶菓子を用意する。宿からの申し送りは、数珠などが一式入った箱の受け渡しである。積立を行い、昔は旅行にも行っていた。												
	地区	上大利	呼称	オダイシサマ（おこもり）	祭日	毎月20日の夜	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事		真言など	「南無大師遍照金剛」
	内容	毎月20日の夜、当番の家に集まり、八畳敷の部屋がいっぱいになるほどの数珠の輪に多勢の人がかかり、数珠を繰りながら、「南無大師遍照金剛」を唱えた。昭和45年頃まで続いた。お茶会だけは続けている。												
	地区	白木原	呼称	オダイシサマ	祭日	毎月20日の夜	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事		真言など	「南無大師遍照金剛」
	内容	毎月20日の夜に当番の家に集まり、数珠を繰りながら、「南無大師遍照金剛」を唱えた。												
	地区	乙金	呼称	オダイシサマ	祭日	毎月20日の夜	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事		真言など	「南無大師遍照金剛」
	内容	毎月20日の夜に当番の家に集まり、数珠を繰りながら、「南無大師遍照金剛」を唱えた。												
	地区	釜蓋	呼称	オダイシサマ	祭日	毎月20日の夜	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事		真言など	
	内容	釜蓋のお大師さまの祭日も盛大に行われ、出店があり、相撲なども行われていた。												
大宰府 市	地区	瓦田	呼称	オダイシサマ	祭日	7月20日	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事	ガメシバマンジュウ	真言など	
	内容	ガメシバマンジュウなどを作り、子どもに接待していた。												
	地区	畑詰	呼称	オダイシサマ	祭日	毎月18日	神仏 ほか		供物		食事		真言など	
	内容	昔は6月17日にガメシバマンジュウなどを作り、子どもに接待していた。現在も本光寺で行われているそうである。												
	地区	向佐野	呼称	観音講	祭日	毎月17日	神仏 ほか	お観音様（掛軸）	供物		食事	お茶	真言など	
	内容	主婦の集まりで、小組合ごとに当番の家に集まり、お観音様の掛軸を掛けてお参りをし、お茶のみ程度で雑談をした。10銭掛けでツミキンヨセをしていた。昭和30年代まであった。												
	地区	大佐野	呼称	観音講	祭日	毎月17日	神仏 ほか	お観音様（掛軸）	供物		食事	ガメシバ饅頭とお酒	真言など	
	内容	女たちがガメシバ饅頭とお酒を持って、当番の家にお参りに行っていた。												
	地区	大佐野	呼称	大師講	祭日		神仏 ほか	御大師様	供物		食事	お茶・お菓子・酢の物など	真言など	
	内容	講が7か所ほどあり、当番の家に女性たちが集まって、お茶・お菓子・酢の物などを食べて話し合いの場であった。お大師様は各戸に祀っている。												
筑紫野 市	地区	馬場	呼称	観音講	祭日	毎月17日	神仏 ほか	観音様（掛軸）	供物		食事	寿司または味噌飯・豆御飯	真言など	
	内容	毎月17日に各戸から米一合を切り、持ち回りで座をもち、観音様の掛軸を拜んで親睦会をした。一口50銭ぐらいを掛けてくじ引きをする頼母子講も兼ねていたが、戦時中に消滅した。												
	地区	観世音寺	呼称	お十七夜（観音講）	祭日	毎月17日の夜	神仏 ほか		供物		食事		真言など	
	内容	毎月17日の夜、観世音寺の庫裏に老若男女の区別なく（子ども）ムラ人が集まって、大きな数珠の玉を一つずつ繰って回しながら、真ん中にいる音頭取りに合わせて御詠歌を唱えながら、数珠繰りをした。お十七夜に使う数珠は、地区に不幸があったとき、お通夜に集まった人が円座を作って死者の供養をする「お数珠繰り」にも用いた。												
	地区	高雄	呼称	数珠講お通夜	祭日	毎月20日	神仏 ほか		供物		食事	にぎり飯・煮しめ・お茶	真言など	「南無大師遍照金剛」
	内容	昔は通夜堂でしていたが、のちに各イエの回り当番となった。10数人で回せばちょうどいいぐらいの数珠で、数珠についての房が自分のところに回ってきたら「南無大師遍照金剛」と唱えて拜む。												
	地区	坂本	呼称	お通夜	祭日	4月20日 （昔は毎月20日）	神仏 ほか		供物		食事	小豆飯・穀物・酢の物・煮しめ	真言など	
	内容	御大師様はもとお滝にあったが、水に流されて、今はオカッテンサンに祀られている。お籠りをし、数珠繰りをする。												
	地区	吉松	呼称	大師講	祭日	毎月20日	神仏 ほか	弘法大師御影（掛軸）	供物	小豆飯・ガメ煮・酢の物・お神酒	食事	おにぎりなど	真言など	
	内容	毎月20日に当番の家に掛軸を掛けて、小豆飯・ガメ煮・酢の物にお神酒を供え、蛸燗・線香・花をあげる。老人から子供までたくさんの人が集まって数珠繰りをして、お接待にはおにぎりなどが出た。												
筑紫野 市	地区	尊田	呼称	大師講	祭日	毎月20日	神仏 ほか	弘法大師御影（掛軸）	供物	小豆飯・ガメ煮・酢の物・お神酒	食事	おにぎりなど	真言など	
	内容	毎月20日に当番の家に掛軸を掛けて、小豆飯・ガメ煮・酢の物にお神酒を供え、蛸燗・線香・花をあげる。老人から子供までたくさんの人が集まって数珠繰りをして、お接待にはおにぎりなどが出た。												
	地区	通古賀	呼称	大師講	祭日	月1回	神仏 ほか		供物		食事	簡単なご馳走	真言など	般若心経
	内容	農繁期を避けて月1回当番の家に集まり、般若心経を唱え、数珠繰りをする。当番は講中から米三合ずつを切って、簡単な御馳走を作てふるまう。2組あって青年も加わっていたが、現在はおこなわれていない。												
	地区	北谷	呼称	大師講	祭日	隔月21日	神仏 ほか		供物		食事	小豆ご飯のにぎり飯	真言など	
	内容	ムラ内で14、5軒の信者のイエの女性と子どもが、隔月21日に当番の家に集まり、数珠繰りのあと、小豆ご飯のにぎり飯を食べて雑談する。講元は輪番。												
	地区	柚須原	呼称	観音講	祭日	毎月17日前後	神仏 ほか	観音堂（聖観音像）、観音像（掛軸）	供物	白御飯	食事	お御供の白御飯と茶菓子	真言など	十句観音経 光明真言 数珠3周回 数珠3周回
筑紫野 市	内容	お世話する当番は順番で、4月の観音講は柚須原観音堂で朝9時から、4月以外は柚須原公民館で行う。公民館で行う場合は観音像の掛け軸を掛け、数珠繰り前に線香と菓子代、お賽銭を上げ、十句観音講と光明真言を数珠を繰りながら、3周ずつ唱える。昔は地区に不幸があったとき、お通夜に大数珠を持っていき、みんなで円座を作って死者の供養をするお数珠繰りをしてた。観音講では左回りで数珠を繰るが、通夜の時は反対の右回りで数珠繰りをした。												
	地区	杉塚	呼称	お大師様のオツヤ	祭日	毎月20日	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事	赤飯・サント豆・ガメ煮・煮しめなど	真言など	
	内容	戦前までは2組において行われていた。												
	地区	紫	呼称	お大師様のオツヤ	祭日	毎月20日の晩	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事		真言など	
	内容	講では一人に毎月2千円積立をして、毎月旅行をしている。これは戦前から続いているそうである。												
	地区	大石	呼称	大師講	祭日	毎月20日	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事		真言など	
筑紫野 市	内容	明治21年に市川徳平さんが四国から勧請してきたお大師様があり、毎月20日が通夜で、百万遍の大数珠繰りなどを行っている。												
	地区	常松	呼称	お大師様のオツヤ	祭日	毎月20日	神仏 ほか	弘法大師像（掛軸）	供物		食事	お茶・果物（昔は小豆ご飯やカシワ飯・餅など）	真言など	ご詠歌
	内容	恩日（オンビ）であり、女だけがご詠歌を唱える。当番の家にはお大師様の軸を掛け、1時間ほどご詠歌を唱えた後に懇談する。												

表1 数珠繰り行事一覧表

た。そんな中、大野城市教育委員会ふるさと文化財課では下大利の御大師様の記録調査を平成8・15・29（1996・2003・2017）年と継続して実施していた。下大利の御大師様は箱の銘などから少なくとも明治19年6月には行われていたが、行事を行う戸数が減少したことに伴い、平成30（2018）年4月20日に最後の御大師様を行い、132年の歴史に幕を下した。同年7月、下大利の御大師様を行っていた方々から本市教育委員会ふるさと文化財課に数珠繰り道具一式が寄贈され、令和元（2019）年6月1日～8月30日に大野城心のふるさと館2階ミニテーマ展にて「大野城市最後の数珠繰り行事 ～下大利のお大師さま～」展を開催した。

本稿では下大利で行われていた御大師様についてその内容を紹介し、他地域で行われている行事

と比較することで集落の女性たちを中心に営まれてきた行事の役割について考察する。

2. 下大利の御大師様

（1）行事の始まり

下大利の御大師様の行事は明治19年に当時の下大利村の代表が四国八十八ヶ所巡りをしたことに

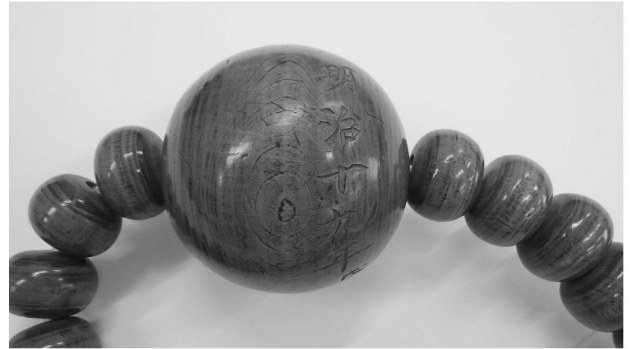


写真1 中玉の刻書



写真2 御大師様で使用する数珠繰り道具一式が収納されている百萬御珠数箱

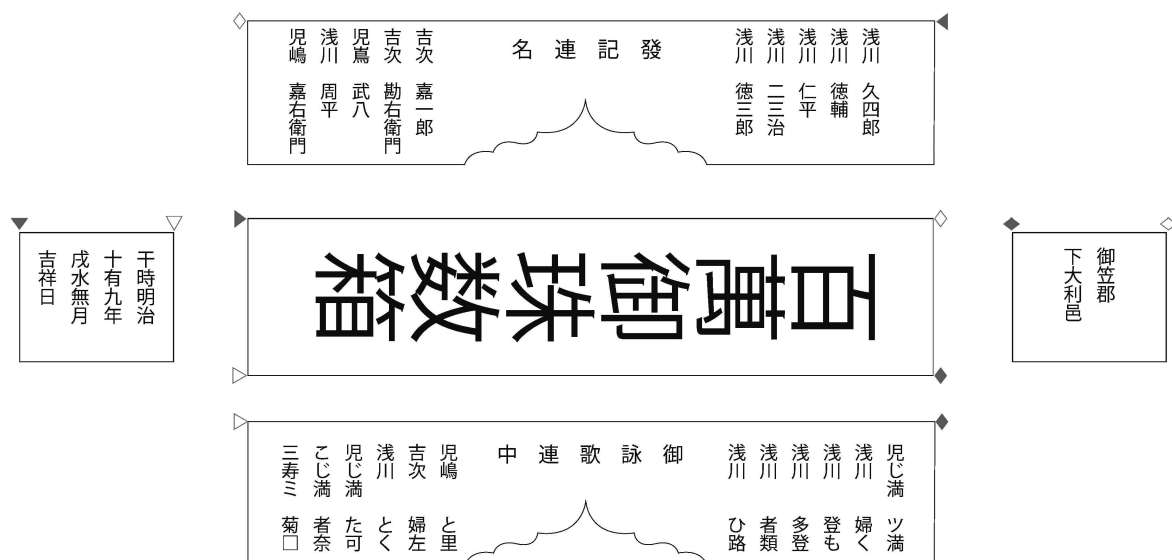


図2 百萬御珠数箱に墨書された文字

村民があやかろうと始めたといわれている。数珠繰りで使用する大数珠の中玉に「明治十九年六月吉日 下大利村」と朱入りの文字が刻まれている。大数珠など道具一式を収納する百萬御珠数箱の蓋外側5面に「百萬御珠数箱」、「干時明治十有九年戌水無月吉祥日」、「御笠郡下大利邑」、「發記連名浅川久四郎 浅川徳輔 浅川仁平 浅川二三治 浅川徳三郎 吉次嘉一郎 吉次勘右衛門 児寫武八 浅川周平 児嶋嘉右衛門」「御詠歌連中 児じ満ツ満 浅川婦く 浅川登も 浅川多登 浅川者類 浅川ひ路 児嶋と里 吉次婦左 浅川とく 児じ満た可 こじ満者奈 三寿ミ菊□」が墨書されている。

このことから、明治19年に数珠繰り道具一式が整えられ、行事が始まったことを示している。また22名の内、「三寿ミ菊□」は下大利出身者ではなく、御詠歌連中の女性たちの最後に名を連ねていることから、数珠繰り道具一式を詠えた時に御詠歌を教えていた女性ではないかと考えられる。

(2) 下大利の御大師様の民俗調査記録

ここでは平成8・15・29年と大野城市教育委員

会ふるさと文化財課が実施した「下大利の御大師様」の民俗調査記録を掲載している。平成8年は早瀬ひろ子が、平成15年は丸尾博恵が、平成29年の民俗調査は石木秀啓、林潤也、白濱聖子、山村智子が行い、山村が書き起こしを行った。

【平成8年1月20日】

行事を始めた明治19(1886)年当時は、50軒(下大利村のほぼ全戸)であった構成員も、戦前には15軒になり、現在は9軒になった。昔は男性のおまつりだったが、近年は女性のみで行われている。下大利では2ヶ所で「お大師さま」の集まりがあったが、今も残っているのは、老松神社傍の地区(小字上城戸、下城戸、川路)だけになった。

下大利のまつりでは毎月20日夜8時に当番の家に来るとすぐにお大師さまの掛軸の前に行き、「南無大師遍照金剛」と3回唱えてお参りをし、皆が揃うのを待つ。全員が揃うと、大箱から数珠を取り出し、八畳の間に広げて、鉦を叩く人と念仏の先導者を起点に円陣を組み、念仏を唱えながら30分ほど大数珠をくり回す。大数珠の房付きの大玉と作成年月日(明治十九年六月吉日 下大利村)入りの中玉が自分の前に来たら、押しただいて

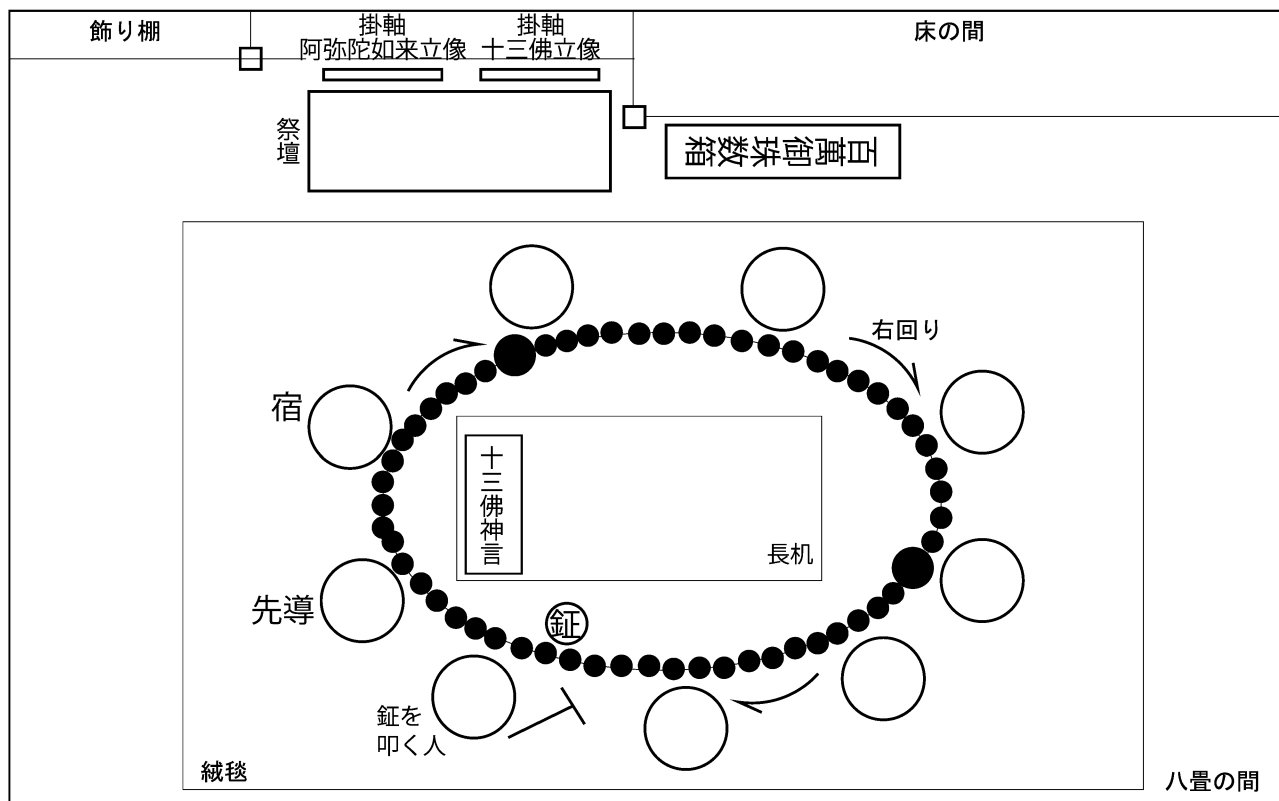


図3 下大利の御大師様の流れ全般図(平成29年12月20日)

祈りを捧げる。全員が同じ調子で数珠を送るので、どこかで弛むことも張りつめることもなく、念仏と数珠を繰る音が同じリズムで流れる。

30年前までは赤飯付の精進料理を食べていたそうだが、今ではお大師さまに赤飯をお供えするものの、簡素化されて茶と菓子のみになった。

【平成15年12月18～20日】

昔は男性も来ていた。数珠繰りの輪の中に入って唱えていた。子供も来ていた。子供はダメということで大人ばかりになった。

御大師様の御通夜だから、女性ばかりが参加する。病気などの時に御大師様に頼ってしまう。お大師さまを続けるのは意志を引き継ぎたいと思う自分の気持ちである。しかし、子供たちが別所帯になっているので、続けていくのは無理だろう。

数珠繰りではないが、昔は春と秋のお彼岸に御笠八十八ヶ所霊場めぐりに近郊から人がお参りにこられていた。その時はお茶を沸かしてお接待をしていた。下大利には57～65番の霊場がある。

【平成29年12月20日】

(当日の準備)

1. 宿から宿へ申し送り

7戸で構成され、11月20日に当番だった宿が、12月20日の当番の宿に数珠道具一式が入った百萬御珠数箱を持っていき、申し送りをする。

2. 宿の準備

宿では床の間に阿弥陀仏立像と十三佛の掛軸を掛ける。十三佛の掛軸は大珠数箱に納められており、必ず掛けておかなくてはならない。それ以外の掛軸は宿となる家で持っている掛軸（弘法大師御影像や弘法大師修行像、阿弥陀仏立像等）を掛けるため、宿ごとに掛軸が異なる。

宿によっては床の間ではなく、仏壇の横に掛軸を掛け、祭壇を準備する。掛軸の前に白い布をかけた台を準備し、花、菓子、果物、豆御飯を供える。果物や菓子の種類は宿ごとに異なり、ケーキや饅頭がお供えされるときもある。必ず豆御飯を炊き、皿に盛り、供える。豆御飯は季節によって、豆の種類が異なり、初夏の頃はピース豆御飯、秋

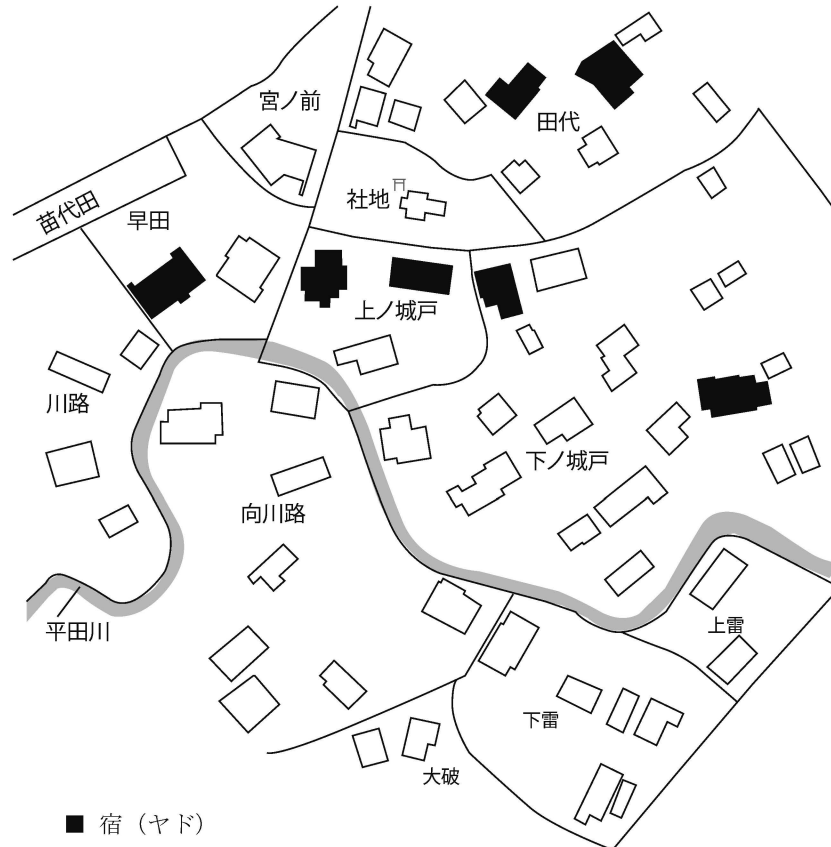


図4 下大利の御大師様の実施地域図（平成29年）



写真3 床の間に掛けられた阿弥陀仏立像掛軸（左）と
十三佛掛軸（右）



写真7 箱から経文と鉦、鉦叩き、大数珠を取り出す



写真4 掛軸の下に祭壇を設える



写真8 鉦の合図で数珠繰りを開始



写真5 豆御飯は必ず供える



写真9 数珠繰りの様子



写真6 茶と菓子を準備



写真10 数珠繰りの様子

から冬なら栗入り赤飯を供える。鉦、線香立て、線香、蠟燭立て、数珠、数珠掛けを用意する。数珠繰りをする際に大数珠が擦れないように絨毯を敷き、部屋を中心に長机を置く。

3. 茶と菓子の準備

湯を沸かし、茶の準備を行う。菓子や果物を人数分、用意しておく。昔は宿が精進料理を用意していたが、準備が大変なため、茶と菓子だけになった。

(宿の行事)

宿に地区の女性たちが集まり始めると、宿の行事が開始される。

1. 祭壇に礼拝

宿に到着したら、まずは祭壇に座り、線香を上げ、鉦を叩き、礼拝した後、講の積立金（2,000円）を供える。

2. 数珠繰り

午後8時、7戸8名の参加者全員で、床の間に置かれた百萬御珠数箱から大数珠、鉦、鉦叩き、十三佛神言が書かれた経文を取り出す。全員で大数珠を持ち、長机を中心にして、円座に座る。大



写真11 大数珠など数珠繰り道具一式を箱に収納する



写真12 数珠繰り後、切れた紐

名称	時代	品質・形状	法量 (cm) ※紐除く	員数	備考
百萬御珠数箱	明治19年6月	木製 箱型 墨書	95.0×25.0 高さ23.0	1点	蓋に「百萬御珠数箱」、側面に「干時明治十有九年戌水無月吉祥日」、「御笠郡下大利邑」、「浅川久四郎 浅川徳輔 浅川仁平 浅川二三治 児嶋徳三郎 吉次嘉一郎 吉次勘右衛門 児嶋武八 浅川周平 児嶋嘉右衛門」、「御詠歌一同 児嶋満満 浅川婦く 浅川登も 浅川多登 浅川者類 浅川ひ路 児嶋と里 吉次婦左 浅川とく 児嶋満た可 こじ満者奈 三寿ミ菊口」墨書あり
大数珠	明治19年6月	木製 絹紐 刻書	全長9.52m、珠数434個（大玉1、中玉1、横玉4、丸玉429）	1点	中玉に「明治十九年戌六月吉日 下大利村」刻書あり
経文		継紙	72.4×24.5	1紙	墨書「カイキョウゲ・・・」
経文	昭和37年12月20日	紙製	86.0×24.5	1紙	墨書「十三佛神言・・・」
十三佛立像	(明治時代)	紙製 掛幅装(紙)	66.6×24.3	1幅	修理時裏紙「家紋(三菱に橘)」「福岡市春吉 花月堂寿永 電160278」印字あり 昭和34年以降に修理あり
弘法大師御修行像		紙製 掛幅装(紙)	70.5×26.5	1幅	「弘法大師御修行口御影」
阿弥陀如来立像	(昭和36年)	掛幅装	28.0×11.5	1幅	裏面に落款「本願寺居務釋光尊」、「方便法身尊形」「願主釋」印字あり 包紙「親鸞聖人七百回大遠忌記念 西本願寺」印字あり
叩き棒		木製 釘留め	叩き部12.3 高さ34.6	1点	打部と持ち手部分は丸釘で接合
鉦		金属製	叩き部径8.2 底部径11.1 高さ3.7	1点	裏面に判読不明墨書あり
鉦		金属製	叩き部径7.7 底部径9.7 高さ3.7	1点	裏面に「浅川徳助 児嶋徳三郎」墨書あり
印鑑袋		紙製 袋	5.0×11.5	1点	朱印「大師」あり
数珠の紐	平成4年～平成29年	絹縫り紐	太4.75m×2 細2.48m	3点	

表2 下大利の御大師講数珠繰り道具一式寄贈品目録（平成30年）

数珠をまたぐことは禁忌とされている。経を詠む人の前に十三佛神言と書かれた紙を置き、鉦を叩く人が横に座る。それ以外に着座のきまりはない。昔は長机を片付けて数珠繰りをしていたが、長机を持ち上げることが体力的に難しくなり、長机を置いたまま数珠繰りを行う。2回叩かれた鉦の音を合図に、十三佛真言が唱えられ、大数珠を時計回り（右回り）に繰る。十三佛真言（各真言×7回）、光明真言（21回）、南無大師遍照金剛（7回）、南無阿弥陀仏（7回）、十句観音経（2回）の順に唱える。真言などを1回唱えたと鉦を叩く人が1回鉦を叩き、唱えるべき回数に達すると2回鉦を叩いて、次の真言や経へ誘導する。数珠繰り中に梵天がついた大玉と中玉が回ってきた時は、大数珠を額近くに持ち上げ、両手で頂いて礼拝する。十句観音経を唱え終わると、数珠繰りは終了と

なる。全員で最後に大数珠を持って、礼拝し、大数珠と鉦、十三佛神言が書かれた紙を箱に戻す。

3. お接待

数珠繰りの後、午後11時頃まで宿が用意したお茶とお菓子で歓談する。昔は御通夜（オツーヤ）だから、精進料理（豆御飯付き）を作って食べていた。

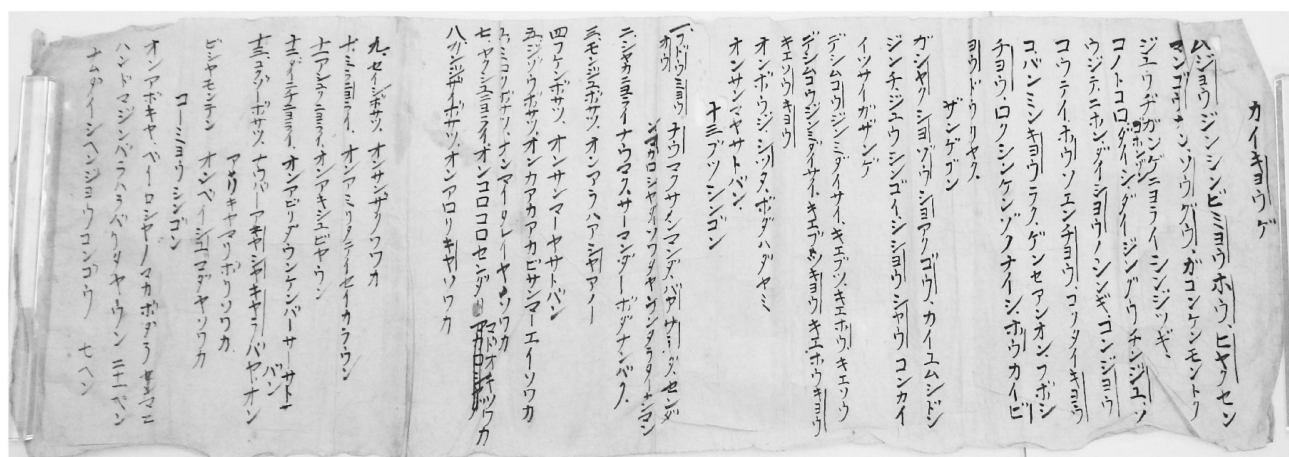
（講の積立金）

1. 親睦

宿の祭壇に供えられた積立金は掛け金を積み立てて、昔は篠栗への参拝に行くバス旅行などを行い、親睦を深めていた。

2. 大数珠の修復

平成4年12月に大数珠の糸が切れたため、積立金で修理に出し、平成5年1月に大数珠が修復されて戻ってきたことがあった。



カイキョウゲ

ムジョウジンシンビミヨウホウ、ヒヤクセン
マンゴウナンソウダウ、ガコンケンモントク
ジュウチガングニヨライシンジツキ
コノコロゴホンゾンダイシ、ダイジグウチンジュ、ソ
ウジテ、ニホン、ダイシヨウノシンギ、コンジヨウ
コウテイ、ホウソエンチヨウ、コクタイキヨウ
コ、バンミンキヨウラク、ゲンセアンオン、フボシ
チヨウ、ロクシンケンゾクナイシ、ホウカイビ
ヨウドウリヤク

ザンゲン

ガシヤクシヨウシヨウシヨウ、カイユムシドン
ジンチ、ジュウシンゴイシヨウシヤウ、コンカイ
イツサイガザンゲ
デシムコウジンミダイサイ、キエフツ、キエホウ、キエソウ
デシムコウジンミダイサイ、キエフツキヨウ、キエホウキヨウ、
キエソウキヨウ
オンボウジツタボダハダヤミ
オンサンマヤサトバン
十三フツシンゴン

一、フドウミヨウオウ
ナウマクサアマンダ、バアサラダ、センダ
ンマカロシヤダーソワヤウンタラターカンマン
ナウマク、サーマンダーボダナンバク
二、シヤカニヨライ
オンアラハシヤアノ
三、モンジュボサツ
オンサンマヤサトバン
四、フケンボサツ
オンアカアカビサンマーエイソワカ
五、ジゾウボサツ
オンマイタレイヤソワカ
六、ミロクボサツ
オンコロコセンタリマドオキソワカ
七、ヤクシニヨライ
オンアロリキヤソワカ
八、カンジザイボサツ
オンサンザクソワカ
九、セイシボサツ
オンアミタテイセイカラウン
十、ミダニヨライ
オンアキシユバヤウン
十一、アシュリニヨライ
オンアビラダウンケンバーサーサトバン
十二、ダイニニニヨライ
ナウバーアキヤシヤカラバヤ、オン
十三、コクゾーボサツ
アリキヤマリボリソワカ
オンベイシユマダヤソワカ
ビシャモンテン
コーミヨウシンゴン
オンアホキヤ、ペイロシヤノマカボダラマニ
ハントマジンバラハラバタヤウン
ナムダイシヘンジョウコンゴウ
七ヘン

上：写真13 経文1「カイキョウゲ・・・」 下：経文1「カイキョウゲ・・・」書き起こし文



写真14 掛軸「阿弥陀仏立像」



写真15 掛軸「弘法大師御影」



写真16 掛軸「十三佛立像」

十三佛神言

一 ふどうみよ おうのうまきあまんだばあきらた
 せんだんまあかしやたあそわ
 やうんたやたあかんまん。
 のうまきあまんだあぼたなんばく。
 二 しゃかのらい おんあらはあしやあのー。
 三 もんじゆぼさつ おんさんまあやさとばん。
 四 ふけんぼさつ おんかあかあびさんまあ
 えいそわか。
 五 じぞうぼさつ おんまいたれいやそわか。
 六 みろくぼさつ おんころころせんたりまどおき
 そわか。
 七 やくしのらい おんあろりきやあそわか。
 八 かんじぎいぼさつ おんさんざくそわか。
 九 せんしぼさつ おんあみりだていせいからうん。
 十 みだのらい おんあきしゆびやあうん。
 十一 あしゆりのらい おんあびりだうんけんばあ
 さあさとばん。
 十二 だいにちのらい のうばうあきやしやきや
 らばや おんありきやまり
 ぼりそわか。
 十三 こくぞうぼさつ びしや
 もんてん おんべいしゆまだやそわか。
 こうみょうしんごん
 一 おんあきやべいろしやのまかばら
 らまにはんろまじんばらばら
 たやうん。 二十一 べん
 一 なむだいしへんじよおこんこお。
 七 へん。
 昭和三十七年十二月廿書之

十三佛神言

一 ふどうみよ おうのうまきあまんだばあきらた
 せんだんまあかしやたあそわ
 やうんたやたあかんまん。
 のうまきあまんだあぼたなんばく。
 二 しゃかのらい おんあらはあしやあのー。
 三 もんじゆぼさつ おんさんまあやさとばん。
 四 ふけんぼさつ おんかあかあびさんまあ
 えいそわか。
 五 じぞうぼさつ おんまいたれいやそわか。
 六 みろくぼさつ おんころころせんたりまどおき
 そわか。
 七 やくしのらい おんあろりきやあそわか。
 八 かんじぎいぼさつ おんさんざくそわか。
 九 せんしぼさつ おんあみりだていせいからうん。
 十 みだのらい おんあきしゆびやあうん。
 十一 あしゆりのらい おんあびりだうんけんばあ
 さあさとばん。
 十二 だいにちのらい のうばうあきやしやきや
 らばや おんありきやまり
 ぼりそわか。
 十三 こくぞうぼさつ びしや
 もんてん おんべいしゆまだやそわか。
 こうみょうしんごん
 一 おんあきやべいろしやのまかばら
 らまにはんろまじんばらばら
 たやうん。 二十一 べん
 一 なむだいしへんじよおこんこお。
 七 へん
 昭和三十七年十二月二十日 書之

上：写真17 経文2「十三佛神言」 下：経文2「十三佛神言」書き起こし文

平成29年12月20日、数珠繰りが終了した直後に、音を立てて大数珠の紐が切れた。つい先ほどまで数珠繰りをしていた時は、大数珠の紐が切れる兆候などまるでなく、下大利の御大師様での数珠繰りは今日が最後としていた日に大数珠が切れ、下大利の女性たちも調査を行っていた文化財課職員も一同哑然といった雰囲気になった。

切れた大数珠は講の積立金で仏壇屋に修理を頼み、京都で修理された。修理を終え、下大利に戻ってきた大数珠を使い、平成30年4月20日に同じ宿で数珠繰りを行った。明治19年6月に始まった下大利の御大師様は、平成30年4月20日が本当に最後の行事となった。

その後、平成30年7月、行事を続けられていた下大利の女性たちを代表して浅川澄代氏から下大利の御大師様で使用されてきた数珠繰り道具一式15点が、大野城市教育委員会ふるさと文化財課に寄贈された。

(3) 寄贈資料から見た行事の変遷

寄贈資料の中で注目されるのが、2種類の経文である。これらの経文は大数珠を繰り回す数珠繰りの間、唱える真言や経を書き記したものである。

経文1はすべてカタカナ表記で書かれており、真言宗の檀家勤行集にほぼ添った内容が記されているが、カイキョウゲ（開経偈）とザンゲブン（懺悔文）の間に、願文が挿入されている。願文には「此所御本尊大師、大神宮鎮守、総じて、日本、大小の神祇、今上皇帝、法僧縁（縁）、国体強固、万民享楽、現世安穩、父母子（子）、六親眷属、乃至法界平等利益」と記され、下大利の御大師様の行事が弘

法大師を御本尊として、すべての人々の現世利益を願う内容となっている。願文の作成には真言宗の僧や門徒との関わりが推定される。

経文2は「昭和三十七年十二月二十日書之」と記載され、平仮名表記で十三佛真言と光明真言が記載されている。この経文は児嶋しずのさんが記したと伝えられており、真言の文字が神言と記されていたり、真言に欠落があったりと口伝の内容を書き起こしていると考えられる。

このことから、下大利の御大師様が開始された明治19年頃には、行事の開始や勤行の場に真言宗の僧や門徒との関わりがあり、真言宗の檀家勤行が戸主を中心に営まれていたが、徐々に女性中心の行事へと変わっていく中で開経偈や願文、懺悔文が欠落したと考えられる。その後、昭和37年に経文2が記された時には、十三佛真言と光明真言のみになっていた。さらに、平成15年の民俗調査記録によると、十三佛真言と光明真言の後に、南無阿弥陀仏と十句観音経が加わった形で平成30年4月20日まで数珠繰りを行っていたことが分かった。

3. 数珠繰り行事の役割

下大利の御大師様は祭壇に掛けられる十三佛立像の掛軸以外は宿となっている家の宗派に任せられていたり、真言宗の檀家勤行集にはない「南無阿弥陀仏」や「十句観音経」が加わったりと、緩やかで大らかな信仰の一面が見られる。このような行事の変化は同じ集落の中で生活をする女性たちによってもたらされたものである。



写真18 柚須原の観音講（筑紫野市）



写真19 大石の大師講（筑紫野市）

そしてこの行事の担い手の大半が他地域から嫁いできた女性たちである。春と秋の彼岸詣りの御接待、神社の祭りの準備、冠婚葬祭のお手伝い等、共同で行う行事は少なくはない。下大利村の通婚圏を知る上で重要な行事に「娘札打ち」がある。この行事は娘が14～21歳くらいまでの間に、御笠郡三十三ヶ所観音霊場を下大利から吉松・大佐野・二日市・立明寺・山口・平等寺・大興善寺・原田・天山・吉木・大石・柚須原・香園・本道寺・太宰府・観世・中村・御陵などを先導者や村役とともに御詠歌を唱えながら巡礼を行う。これは単に信仰のためだけでなく、巡礼する土地の人々に婚期のきた村の娘をそれとなく知らせるのが重要な目的の一つであった。巡礼した土地はそのまま通婚圏となり、昭和10年頃の戦前まで「娘札打ち」が続けられた。巡礼地では下大利と同じく数珠繰りを行う御大師様のいわゆる大師講の他に、観音講を行う地域もあった。観音講は毎月17日の夜に当番の家に集まり、「十句観音経」や「光明真言」等を唱えながら、数珠繰りを行う行事で、現在は筑紫野市柚須原で行われている。このような地域との通婚は従来の講の作法に影響を与え、また各家々の宗派の違いも加わり、十三佛真言・光明真言・南無阿弥陀仏・十句観音経を唱える「下大利の御大師様」の行事が形成されていったと考えられる。下大利で毎月20日の夜8時から御大師様が行われ、女性たちが円座になり数珠を繰ることで発生する鉦と数珠を繰る音、先導者に従って唱える真言だけが響き、大数珠は滞ることなく廻り続ける。数珠を繰るという行為は女性たちが经文1の「願文」にある「乃至法界平等利益（みんなが幸せになりますように）」を願うことであった。数珠繰りの後、茶と菓子で「おしゃべりをする」とがこの行事が長く続いてきた大事な要素だったと考えられる。月に一度、同じ集落の女性たちだけで夜遅くまで繰り広げられたおしゃべりの内容まで聞き取ることはできなかったが、他地域から嫁いできた女性たちにとって、家ごとの先祖祭祀を越えた信仰にふれる場であり、集落の情報を知る場でもあり、なにより同じ集落で暮らす女性たちの大事な息抜きのものであったのではないだろう

うか。

また、令和元年に大野城心のふるさと館で「大野城最後の数珠繰り行事 ～下大利のお大師さま～」展を開催した際に、市民の方から「畑詰ではまだ毎月18日に数珠繰りを行っている。」「上大利では数珠繰りをしていないけど、今でもお茶会は続けている。」等の情報が寄せられた。

これらの情報を元に今後も継続した民俗文化財の調査を進め、「大野城最後じゃなかった数珠繰り行事」展（仮）の開催を目指しつつ、きめ細やかな地域の文化財情報の発信に努めていきたいと考えている。

謝辞

最後に本稿をまとめるにあたって、ご協力いただいた個人や団体の方々に記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。浅川和代、浅川澄代、浅川ヒデ子、浅川正代、市川千香枝、市川敏光、市川正博、児嶋恵美子、児嶋絹子、児嶋邦次、小嶋恵子、渋谷恵子、長谷繁光、長谷みゆき、長谷ゆき子、柚須原婦人会

【参考文献】

春日市，1994，『春日市史』下巻。
大野城市，1995，『大野城市史』民俗編。
筑紫野市，1999，『筑紫野市史』民俗編。

山村 智子（やまむら ともしこ）

大野城市教育委員会ふるさと文化財課職員